

# 生涯学習とバリアフリーのまちづくり

—松戸市における取り組み—

蓑輪 裕子 城戸 美和

## 1 はじめに

平成12年に国土交通省が「高齢者，身体障害者等の公共交通機関を利用した移動の円滑化の促進に関する法律（交通バリアフリー法）」を制定し，現在，全国各地で交通バリアフリー法に基づく基本構想作りが進められている。交通バリアフリー法の目的は，鉄道駅等の旅客施設や車両のバリアフリー化，さらに駅などを中心とした一定地域内の重点的かつ一体的なバリアフリー化の推進である。千葉県内では，平成16年8月現在で，千葉市，船橋市，柏市など7市が基本構想を作成済みのほか，現在，松戸市，習志野市など4市が作成中である。公共交通機関が高齢者や身体障害者等にとって利用しやすくなることは，子どもや子連れの家族，あるいは大きな荷物を抱えた人等，あらゆる人々にとって利用しやすくなり，快適な外出が可能となる。少子高齢社会を迎えたわが国には，バリアフリーのまちづくりの視点は不可欠であり，これにより，多様な世代，多様な層がさらに積極的に生涯学習に励むことができ，社会参加が進むと考えられる。また街のバリアフリー化を推進する際に，周辺地域の人々が生涯学習の一環として関わることができれば，やりがいのある役割を果たせると同時に，自分自身が暮らしやすくなるという直接的な恩恵も受けることができる。バリアフリーのまちづくりに行政や建設分野の専門家だけが関わるのではなく，一般市民が生涯学習

の一環として関わる機会を創出できれば，双方にとって大きな意義があると考えられる。

## 2 研究の目的，方法

筆者等が事務局を務める生涯学習サークル「松戸のバリアとりのぞこう会」では，松戸市の交通バリアフリー法に基づく基本構想づくりのための市民の意識啓発を目的として，多様な世代が参加する生涯学習講座を開催した。本研究では，その講座の概要や成果を報告し，生涯学習におけるバリアフリーのまちづくり講座の教育効果を探ると共に，講座を開催する際の課題を見出し，効果的な講座の開催方法を検討する。

研究の方法としては，内容の異なる学習講座を各1回，合計2回，連続的に開催し，その経過やグループワークの内容等をまとめる。また講座後に実施したアンケートの回答を整理し，出された意見や感想等から講座における課題や今後の展開方策等を検討する。

## 3 講座の概要および準備の経過

### 1) 講座の概要

開催した講座の概要を表1に示す。講座は約3週間の間において，2回開催した。1回目は，市都市整備本部の交通バリアフリー基本構想の担当者に出前講座を依頼し，交

表1 講義の概要

	日時	会場	参加者	当日のプログラムの概要
1回目	2004年 6月25日 13時～15時	聖徳大学	市民23名 (うち車いす利用者1名) 聖徳大学 教員5名 学生7名	1 交通バリアフリー法の出前講座(講師：市職員) 2 班ごとのグループワーク，発表
2回目	2004年 7月6日 10時～14時半	聖徳大学，松戸駅周辺	市民14名 (うち視覚障害者1名， 肢体不自由者1名) 聖徳大学 教員4名 学生6名	1 車いすの操作説明 2 班ごとの駅周辺～大学のバリア点検 3 バリアフリービデオの視聴(昼食時) 4 全員での意見交換，バリア地図の作成

注) 参加者人数は部分的な参加者も含む。

表2 参加者募集の方法

<1回目> ・市広報誌への掲載 ・聖徳大学生涯学習講座「人にやさしい住まいづくり」受講生への案内ちらしの発送 ・市内まちづくり関連のメーリングリストによる案内 ・松戸市まちづくり連絡協議会福祉の委員会メンバーへの呼びかけ	・市役所および各地区の市民センターへの掲示 ・聖徳大学教員，学生への呼びかけ
<2回目> ・1回目参加者への電話連絡 ・聖徳大学教員，学生への呼びかけ	・市内まちづくり関連のメーリングリストによる案内 ・松戸市まちづくり連絡協議会福祉の委員会メンバーへの呼びかけ

通バリアフリー法や松戸市の福祉のまちづくりへの取り組み，他市の先進事例等に関する講義を聞いた。また講義を受けた後にグループに分かれてそれぞれの感想や意見を自由に話し合い，最後に各グループの代表者が要点を報告した。また，市担当者への質疑応答の時間も設けた。

2回目の講座では，体験型のワークショップを行った。当日の流れとしては，まず教室内で車いすの操作やけが防止等のための留意点について説明した。その後，班ごとに分かれてあらかじめ設定した経路に沿って聖徳大学と松戸駅を往復し，何らかの障害を持つ当事者や介護経験者などの説明を聞きながら，地図に問題点や気づいた点を記した。大学に戻った後は，昼食を取りながらバリアフリー啓発用ビデオを視聴し，その後，全員で机を囲み，付箋に気づいた点を記して地図に張り込んだ。また，経路に沿って付箋の記述を読み上げながら，問題点をまとめていった。

## 2) 参加者の募集方法 (表2)

1回目の出前講座では，広く参加者を募るため，市広報に講座の案内を掲載したほか，市役所および市内の市民センターにちらしの掲示を依頼した。また聖徳大学生涯学習講座で筆者が担当している「人にやさしい住まいづくり」の受講生のうち，松戸市在住の生徒に案内のちらしを郵送した。そのほか「松戸まちづくりメーリングリスト」を通じて，市内で様々な活動を行っている一般市民，専門家市民に呼びかけた。松戸市には以前から，様々な活動を行っているまちづくり連絡協議会があり，その傘下に福祉の委員会もある。以前は松戸駅前の福祉マップの作成や街点検なども行っていた実績があり，その委員会の参加メンバーにも事前に相談や参加の呼びかけを行った。また，聖徳大学の教員や，福祉のまちづくりに関する授業をとっている学生(短大生活文化学科生活環境コース2年)も前半の講義の際に参加した。

2回目の体験講座では，1回目の参加者および障害を持つ当事者数名に電話で参加を依頼した。また1回目と同様，「松戸まちづくりメーリングリスト」を通じて呼びかけた。そのほか，聖徳大学の教員および児童学科社会福祉コースで福祉のまちづくりに関する授業を受講している学生が参

加した。1回目終了後，2回目までは準備の期間がきわめて少なく，市広報誌への掲載や市民センター等への掲示はできなかった。またワークショップの体験は初回であるため，人数をある程度しぼった形で行いたいという意図もあった。

## 3) 当日の配布資料

1回目の講座では，市の担当者からの資料として，講義のレジメおよび交通バリアフリー法の解説パンフレットを配布した。また班ごとに話し合う際の参考資料として，松戸市内の各駅のバリアの状態および駅周辺の地図を添付した。

2回目の講座では，点検の際に用いる聖徳大学と松戸駅までの歩行ルートの入った地図を配布し，直接地図への書き込みを依頼した。また点検後，社会福祉分野の先生に，車いす利用者の歩道の通行の仕方のプリントを配布および解説していただいた。

## 4 結果と考察

講座後の感想等に関するアンケート結果を表3にまとめる。アンケートの回収は，後日，FAXやメール等で行うことにしたところ，回答者人数は1回目9名，2回目6名と少なかったが，それぞれに今後の進めかたの参考となる貴重な意見が出された。

### 1) 開催案内，広報について

開催案内については様々な方策をとったが，広報誌等への掲載は数ヶ月前から準備が必要であり，手続きに手間がかかる。案内の郵送の場合は手間がかかり，郵便代等も必要となる。そのほか口コミによる連絡は手間がかかり，十分に行き渡るとはいえないが，的を絞った連絡が取れる。またメーリングリストによる連絡はメールの利用者に限られるが簡単で効果が大きい。

1回目の企画では，様々な媒体を用いることで，多様な層の参加を得ることができた。今後はさらに効果的な参加者の募集方策を検討して行きたいが，他の既存団体の連絡方法を見ると，メーリングリストとFAXによる連絡網の併

表3 講座後の感想（丸数字は講座の回数）

## 1) 出前講座、グループ討議などの企画の感想、意見

## ○グループワークの時間が少ない

- ・グループ討議の時間が少なくみんなの意見が十分に出し切れていない
- ・ワークショップの時間が短すぎた
- ・時間がなさ過ぎて十分に話し合える時間ではないが、投げかけのきっかけとしてはよかった

## ○よい機会だった

- ・突然の参画ですべてが初めてで、よい機会が持てた
- ・すばらしい出会いの機会が持てた
- ・まわりに障害を持っている人たちに関心を持つかたが多いので、とても勉強になった
- ・街中のバリア点検の時に、ほかの参加者のかた（視覚障害者ご本人と介護経験者）の解説に本当に教えられた②
- ・1グループを少ない人数にしたことが効果的だった②
- ・学生たちとの協働作業ができたことが良かった②
- ・学生の皆さんも頼もしく思った②
- ・合間に視聴したバリアフリービデオがとても内容が充実していて興味深かった②

## ○講座の開催場所、開催方法への工夫の必要な点など

- ・この部屋に到着するまでにバリアがたくさんあり、障害を持っている人が来るのは大変だと思った
- ・ワークショップには興味があるが、事前に知っていればそれなりの準備をして出席できたが突然のことなので少し戸惑いがあった
- ・今度は講義には地域別のグループ分け等の配慮があるとよい
- ・参加者はそれなりの目的を持って出席しているはずなので、一般的な話は不要と思う。松戸市の具体的な施策を話してもらい、その視点からの討議もよいと思う
- ・今後の検討課題として、費用を要することなくすぐにも改善可能なバリア部分については議論の取りまとめ段階であっても先行して関係機関へ提言し、改善を促すアクションがあっても良いように感じる（例えば駅前付近のスクランブル交差点に設置されている音声信号の不具合の改善など）②
- ・意見が交差していて聞き取りにくかった。一人の人が話しているときは話さないほうがよかった②

## 2) 松戸のバリアフリーに関して困っていること・工夫していること・感想等

## ○看板、放置自転車について

- ・商店の看板、自転車が邪魔
- ・放置自転車が問題である
- ・バリアフリーに配慮したい多くの施設があるが、とにかく放置自転車が妨害している②
- ・歩道の看板やのぼりで子どもがけがをしたこともあり、危険である。警察なども知っているが黙認しているのが現状である
- ・松戸市の迷惑条例があるが、それで看板の除去はできないか
- ・道路は通行する目的が最優先と思う。必要とはいえ電柱、標識、街路灯、消火栓告知ポールなどの公共性の物件や私業的な販売促進用のぼり、看板などなど、通行の妨げになるものが多い。公的なものは管理統一、私業的なものは設置禁止、即撤去、ペナルティなど厳しい対処が必要と考える
- ・自動車に乗っている時は、歩行者が非常に邪魔に感じるし、自転車に乗っている時は、歩道にいる歩行者が邪魔に感じる。また、歩いている時は、自動車や自転車が危なく思う。だから、どの視点から道路のことを考えればいいのか難しい

## ○点字ブロック、視覚障害者への対策について

- ・点字ブロックの配置の矛盾がよくある
- ・点字ブロックは、利用者の大半は点字ブロックと地面の明度の差を頼りにしているにもかかわらず、最近、地面と同色系のものを設置するケースが多く、とても利用しづらい。もっと、障害者のための街づくりを考えてほしい
- ・点字ブロックは弱視の人は色の区別がつきにくい。白杖を持っている人が全盲の人とは限らない。位置は道路が狭い場合は歩道の真ん中に入った方がよい
- ・点字ブロックの黄色の認識度をもう一度深く考えるべきだと思った②
- ・片目の場合、立体視できない。階段の明度差があるとよい

## ○具体的地域の問題点について

- ・松戸駅西口にエレベーターがない
- ・エレベーターとエスカレーターは全然違うのにいまだにエスカレーターがあればよいではないかというのは残念
- ・松戸駅西口のデッキが、すべりやすいので危険である。せつかく道路の整備をするのに、なぜそういう材料を使うのか
- ・歩道に使われているカラーブロックが、雨の日にするので、危険である
- ・松戸駅前付近の公共広場もあるマンションに点字ブロックがない②
- ・みのりハイタウン跡地の歩道に半分くらいネットが張られ、歩道が狭くなり困っている。現状は、ガードレールはない、歩道は狭くなった、街灯はないなど、非常に危険な状況にある。市に働きかけても対処してもらえない
- ・北小金駅は観光客も多く来るのに車いす対応がまったくない②
- ・駅員が電動車いすを見て、「通行人にぶつかったら大変だ」とJRの責任を回避してきた（危ないので構内に入らないよう注意を受けた）。プロであるならどこへ行くのかとたずね、先導してくれたほうがその職員にとっても仕事を増やさず、みんなに感謝され、心地よかったと思う②

## ○総合的、全体的課題等

- ・駅周辺だけバリアフリー化しても、家から駅に行き着くまでがバリアだらけなので、あまり意味がないのではないかと。面的な整備が必要では

- ・松戸市はバリアフリーという点で相当遅れている。構造、点字ブロック、意識(とくに自動車、オートバイの駐輪など・・・)
- ②
- ・養護学校の放課後活動の中で、児童・学童(肢体不自由児で少し知的障害がある)と散歩や外出(電車での外出を特に喜ぶ)をしているが、残念ながら松戸市内の駅舎での乗り降りは非常に不便で、一度行こうという意欲がでない。もっと公共交通機関を利用したい。そういう意味で車いすを使うかたのためのマップや情報が不足している
- ・車いす、視覚障害者の両者が使いやすい街づくり
- ・身障者用トイレは手すりの配置をもっと考慮すべき。全身マヒの場合、温水洗浄便座が付いていると利用できない。前向きのまま移動、手すりに体をもたげる。車いすの基準をどこにおくのか・ふれあい22のトイレ：広い。板の間、ベンチがあるほうが良い
- ・バスにノンステップバスの時刻表があるとよい。始めはノンステップバスがなく、車いすで利用するのは大変だった
- ・自分で工夫していることは電動車いすを人や公共物にぶつけないようにしている②

### 3) 松戸市のバリアフリー化に関して市民としてどのような取り組みをしていくのが良いか

#### ○市民のボランティア活動、心のバリアフリーについて

- ・“バリアフリーと思いやり”社会教育、家庭教育、学校教育が原点②
- ・一部の人だけでなく、市民全体に関心を持って取り組んで行けるような意識付け、イベントが行われたらよいのでは。大人だけではなく、子どもも巻き込んでいけたらよいのでは②
- ・松戸市内のすべての道路上において、公共性のあるもの以外は一切置かないという、市民運動を芽生えさせ、近隣のかたがたと共に和を広げて街の美化に努める
- ・スーパーマーケットや鉄道などに市民ボランティアチームで障害者のバリアをアナログにヘルプするのも人的なバリアフリーだと思う②
- ・土いじりを通じて地域の活性化を進めたいと現在野菜づくりを楽しんでいる。何か相通ずるものがあり、仲間たちにバリアフリー法について未熟ながらPRをしたい

#### ○自らの取り組みについて

- ・極論かもしれないが日頃困っている点を列挙しても何の解決策にはならないと考えている。現状を踏まえての最善策を考えて行動したい。松戸市内23駅すべて調べている。バリアフリーは新京成線の方がJRより進んでいる
- ・自分自身の意識が低かったと反省した。公共の場で困っている人には声をかけるようにしている
- ・現在は困っていることの実感はありませんが、将来を見るにつけ、今から認識を新たに勉強をしたいと思う
- ・ボランティアでたまたま経験したことが一つのきっかけになったが、松戸市が日本で一番のバリアフリー化が進んでいるというように少しでも自分のできることから始めて行きたい②

#### ○障害を持つ立場から

- ・ハード面での物的バリアをクリアするためには、協力していただける人の心のバリアフリーがどうしても必要不可欠なので、市民一人ひとりがそのことに気付く関心を抱いて、積極的に声をかけるなどの行動を社会的責任として実践していただくことができれば、高齢者・障がい者はひとり戸惑いながらその場に置き去られ、立ち尽くすということなどはまったくなくなるのではないかと考える②
- ・挨拶をするのも心の交流だが、それから先「手を貸してください」と声をかけるのは難しい。単刀直入に「お手伝いしましょうか」等と言っていただく「この人は私と時間を共有してくれるのだ」ということで遠慮せずにヘルプしていただくことができる。自分の方から声をかけにくいのは、そういったことがわからないし、声をかけて相手に悲鳴をあげられ、逃げられてしまったことも何度かある②

#### ○講座の開催について

- ・このような事は回を重ねることが大切だと思う
- ・このような会が数多く開催され、一人でも多く参加されることを切望する
- ・このような企画は定期的に開催することで市民に認知され意識が向上すると思うので、テーマを替えて引き続いての開催を希望する
- ・はじめての参加で、これからも参加したい。まだ気がつかない点のほうが多いし、不勉強が身にしみる
- ・当会の活動が単に形式的なユニバーサルデザインのまちづくりをめざすことより、はるかに人間同士の心あるまちづくりをめざすことを特に期待する②

#### ○市と市民の協力について

- ・計画等への市民参画(特に当事者)②
- ・市民として行政に言い続けるより仕方がないのでしょうか
- ・市民の声と行政とが一体となって少しずつでも実現していただきたい
- ・役所が上から判断を下すのではなく、市民の意見を聞いて取り組みをするのがベスト。市民も今を考えないで老後、病気になったときを考慮して考えないといけない
- ・市としての活動現況は理解できるが、実現するのは何年先のことか。まずは松戸地区に絞込み、全市民に関心を持って活動状況をスピーディに実感できる取り組み(松戸広報などを活用して逐一経過状況を知らせる)が望ましい
- ・各自自治体によってバリアフリー化の取り組みや考え方がバラバラで異なっては意味を要しないので、少なくとも東葛地域というような広域の単位で、統一した基準をもって協調し、内容を充実させつつある先行地域を中心に、議論がまとまるような活動ができてくれば、より一層住みやすいまちづくりの実現が可能になるように感じる。特に松戸市内でも中心地から離れた隣市に近い場所に居住する自分からするとそれを強く必要に感じる②

#### ○その他、質問など

- ・障害児と出かける時のバリアフリーの調査ポイント
- ・チェックシートが欲しい。東京都建設局は作成済みと聞いている

- ・東葛地区のまちづくりのネットワークなども当然あると思うが、その情報はどこで入手できるか
- ・子どもがバリアフリーに対して興味・関心を持つようなビデオ、その他の教材等があったら教えてほしい②

表4 参加した学生からの主な感想（2回目 体験講座について）

- 体験して良かった
  - ・体験してとても良かった。自分の中ではわかっているようでわかっていない部分がたくさんあった。様々な場所が危険だったり使いづらいことがよくわかった
  - ・車いすに乗った経験はあり、自分で回すのがとても大変なことは知っていたが、押すほうもとても神経を使うことを知った
  - ・実際に車いすに乗ってみると、授業を受けただけではわからないことがたくさんあり、とてもよい経験ができた。障害者の生活は、教科書を見て覚えるのではなく、実際に体験をしないとその人の気持ちや大変なことがわからないということがわかった。次は今回体験できなかった、違う障害を持つ人たちと一緒に体験をして学びたいと思った
  - ・一般の人と一緒に体験をできて、学生同士よりもまた違った意見を聞く事ができた
- バリアの実態について
  - ・普段自分たちが歩いているコンクリートや、ちょっとした段差でも車いすの人にとってはとても大きな障害で、危険であることを体感できた。まだまだ改善していかなければならない所がたくさんあることを知ることができた
  - ・以前より街はあらゆる面で改善されてきたと思うが、まだ不便なところはたくさんある。歩道が狭い、段差が多い、スロープが急など
  - ・目の見えない人たちにとっては良い点字ブロックと悪い点字ブロックがあることがわかった。無意味な点字ブロックも多く、そのまま歩くと危ない所までであった。作る人はもっと目の見えない人たちのことを考えてほしいという話を聞いて、私たちがなぜこのように無意味なことをしているのか疑問に思った
- 盲導犬について
  - ・盲導犬は健常者も気に止めない階段や段差等で主人に障害があることを知らせていた。盲導犬の賢さをとても実感することができた
  - ・盲導犬を受け入れていない場所も人間もいると思うが、わかったことは、盲導犬は主人と盲導犬で一人ということ。そのことをもっと私たちがわかるべきだし、このような体験をできた私たちが伝えていかなければと思った
  - ・盲導犬は、自転車や障害物などで主人がけがをしないように、あたらないように、と自分の体をはり、自分が先に歩き主人をかばっているのがとても感動した
- バリアフリーの配慮について
  - ・エレベーターにある鏡の意味は、車いすでも安全に出られるようにつけたものだと知ることができた。他にもたくさんのごとを学べた
- 今後の自分自身あるいは社会全体の取り組みについて
  - ・バリアフリーの時代といわれているが、もっと障害者の人たちのことを考え、みんなが安心して普通に暮らせるような街づくりをしていってほしいと思った
  - ・どのような障害を持った人でも充実した生活が送れるよう私たち一人一人が考えるべきだと思う
  - ・これらの貴重な体験を忘れずに今後の勉強に生かしたい

用などがなされており、参加者名簿の蓄積ができた段階で、これらの方法を試行していきたい。

## 2) グループワークによる討議について

### ①グループワークの形式について

グループワークといった参加型の討議については、多くの参加者にとって、やや抵抗感があることがうかがわれた。とくに1回目の講座では、講師による講義の後、後半は斑ごとに自己紹介や意見交換をしていただくことを説明すると、多くの参加者から戸惑いの雰囲気が伝わってきた。またこのようなグループワークとは知らずに参加したため、グループワークは不本意との意見を表明して退席した参加者もいた。従来の学校教育のように、受け身で講義を聞き、自分一人の頭の中で考える形の学びに慣れている場合には、意見や感想を述べるなど自分から発信することに対して大きな抵抗感があることが感じられた。また、「事前に知っていればそれなりの準備をして出席できたが突然のこ

となので少し戸惑いがあった」という感想もあり、事前に十分な説明をすることが必要だと感じられた。グループワークの実施については、案内のちらしに「グループに分かれて自分たちのまちのバリアフリー化について共に考えてみる」と記していたが、さらに相互の意見交換であることを強調した説明が必要であった。

また、グループ討議に入る前に、気楽に意見交換ができる雰囲気作りの場も必要であったと思われる。リラックスできる雰囲気作りのために、多くのワークショップでは最初にゲームなどを盛り込むことがある。ただし中高年の参加者はこれらのゲームにはかえって戸惑いがあることも考えられ、多様な世代が積極的にグループ討議に入れる方策をさらに検討する必要がある。

### ②コーディネーター、記録などの役割分担

今回の講座では、参加者の申し込みをできるだけ事前に受け付けたが、参加人数がはつきりしないこともあり、グループ分けや司会、記録係等について、事前の準備や担当

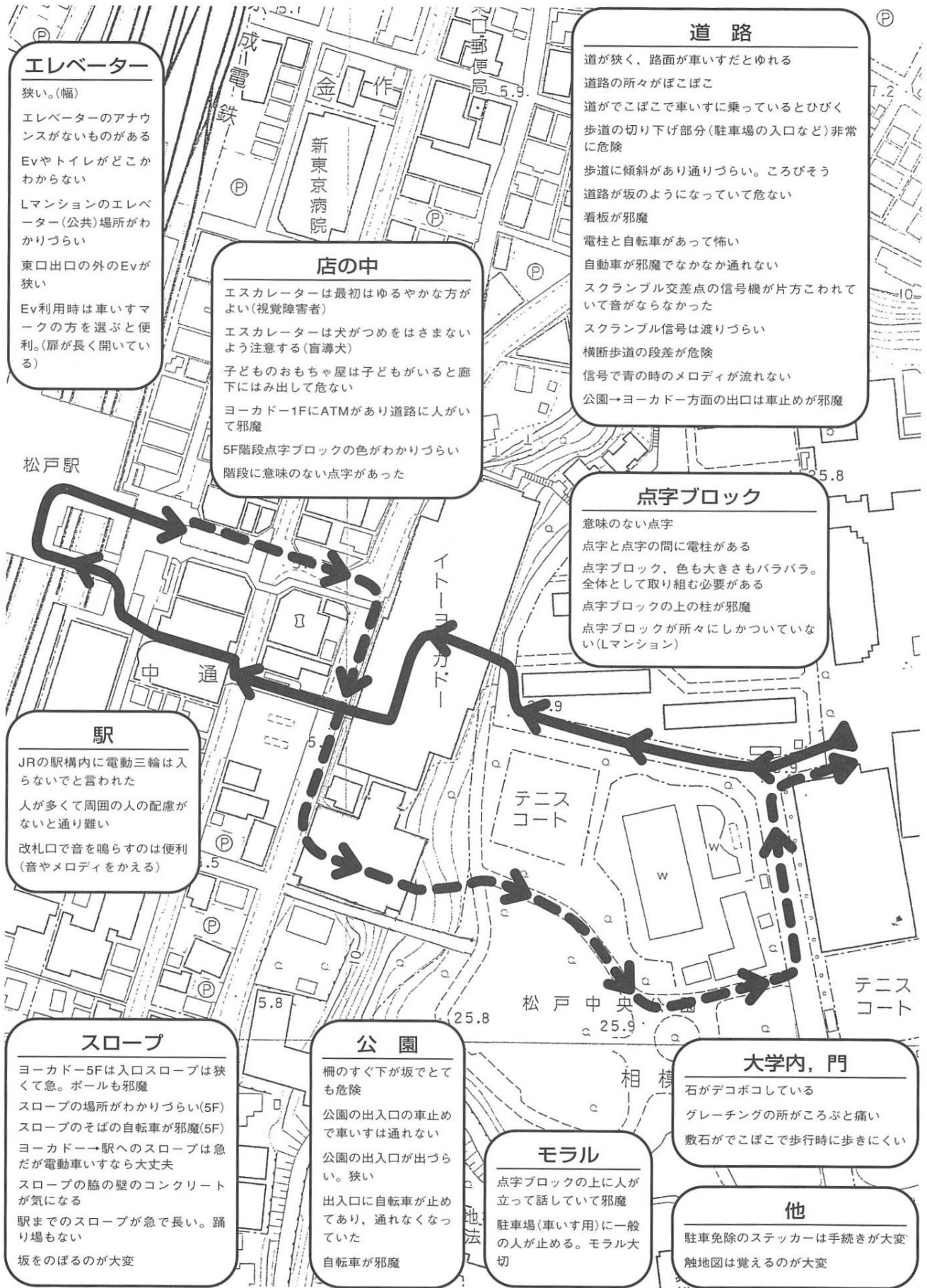


図1 まちのバリア点検のルートと気付いた点(聖徳大学~松戸駅)

線の種類: 実線 行き  
破線 帰り

者への依頼が不十分であった。司会や記録を担当するスタッフが事前に確保しておくことは、円滑なグループワークの運営には欠かせないが、現状では進行役を務められるスタッフの人員が不足しており、さらに幅広い参加を呼びかけたり、経験を蓄積して行くことが必要とされている。

### ③講座の時間配分について

1回目の講座では、出前講座および意見交換を午後の2時間の時間で行った。そこで、グループごとの話し合いでは、自己紹介を行い、感想や意見を自由に述べて一巡するとすでに時間が終わってしまったところが多かった。また感想でも「時間が足りなかった」という意見が多かった。実は当初から、講義で基礎的知識を身に付けることと意見交換を2時間で行うことは、時間的に厳しいことが予測されていたが、事務局側のスケジュールの都合でやむを得ない時間配分であった。ただしアンケートでも、「投げかけのきっかけとしてはよかった」という意見があり、問題意識を芽生えさせる目的は果たせたことがうかがえる。また各グループの意見交換の内容や感想を見ても、日頃困っている点や、市への要望など多様な意見が出され、短いながらも概ね満足する意見交換ができていた。

2回目の講座では、午前中に点検活動、昼休みをはさんで午後に意見交換を行った。10時～14時半と、1回目より長時間であったが、それでもやや時間不足の感があり、様々な意見が出ている際でもある程度見切りながら次の話題に移っていく進行が必要であった。

## 3) まちの点検活動について

### ①点検時の問題について

2回目の講座でまちの点検を行った際には、予想外の様々なレベルのバリアに出会い、屋外での体験の難しさを感じた。一つは駅の改札口前の通路を電動式車いす(三輪)で通行する際に、駅員から危ないため駅構内に入らないよう、注意を受けたことである。自転車に類似した機種のため、職員は構内立ち入り禁止と考えたようであったが、肢体不自由者が自分の足として利用している乗り物に対して注意を受けた点で、残念な出来事であった。この出来事からは職員教育の重要性が指摘され、一部の路線では経験を積んだ職員が他の職員向けに研修などを行っていることが話題となった。

また事前に下見をした際に、車いすでも通過ができると判断していた点検経路内の公園の出入口が、日中には不法駐輪の自転車置き場となっており、通過できる状態ではなかった。さらにその場所ではオートバイ除けの柵自体が、車いすの通行を妨げており、電動車いすを持ち上げて運ば

ざるを得なかった。障害を持つ当事者による街点検の際は、安全性や本人の体調に十分配慮する必要がある。そこで、できるだけ本番と同じ時間帯での事前の下見が不可欠で、利用する福祉用具の寸法を考慮すること、周辺地域への連絡や協力依頼を十分に行うことも必要であると感じた。ただし参加者の感想では「現実の街のバリアの程度が実感できたのでかえってよかった」との意見もあり、目的や状況に合わせた配慮が必要だといえる。

### ②当事者や多様な世代が参加する街点検について

障害を持つ当事者と一緒に、あるいは車いす等に試乗して街を点検することは、障害者の方の生活の様子や障害物の状況をより具体的に学ぶことができ、参加者からも、「目からうろこが落ちた」「勉強になった」との感想が相次いだ。たとえば、盲導犬の様子、車いすでの生活等、「実際に間近で見たり、自分で体験することで初めてわかることが多かった」と感想でも指摘されている。

多様な世代が一緒であったことも、学生と社会人の双方にとって良かったとされている。将来の街づくりを担う学生たちと共に学ぶことは、他の世代にとっても好ましいと考えられており、また学生からも、他世代の人から学べることが多いことが感想としてあげられていた。

その他、街中のバリアに関しても各々が多くの事柄に気付くことができ、たとえば、点字ブロックはあるが中途半端な敷き方をしているなど、せっかくの配慮が必ずしも活かされていない様子を実感していた。また逆に、車いす対応エレベーター内の鏡など、バリアフリーの配慮の内容についても学んでいた。

これらの体験による気付きが、さらに勉強する意欲を生じさせ、自分たちでできること、街づくりのありかたなどを考えるきっかけとなっていた。

## 5 まとめ

生涯学習の一環として、地元のバリアフリーの街づくりを考える講座を持ったが、関心の高い市民や学生、教員および障害を持つ当事者の参加を得て、充実した講座を開催することができた。また講座を通じて、松戸市のバリアフリー化に関して表3、図1に示したように多くの具体的あるいは総合的な意見があげられた。これらの意見は、市等に提出すると共に、参加者それぞれにも何らかのフィードバックを行う予定である。

参加者からは講座の継続的な開催への期待が寄せられていたが、このような企画は継続することで意義が増すと考えられる。また一人一人の「心のバリアフリー」が最も大切であることから、より多くの人に参加してもらおう企画を

考えていくことが必要とされている。生涯学習サークル等の活動は、スタッフの人手不足から活動が休止状態になることも多いが、参加者をスタッフ側に引き込みながら、無理のない形での継続の方策について、今後さらに検討を重ねたい。

今回の講座では市職員に講義を依頼したり、成果を市に提供するなど、街づくりを担う行政との連携がとれた。これらは参加者に活動の意義を感じさせ、より積極的に参加するきっかけとなったと思われる。また今後、街が変わるなどの具体的な成果が少しでも見られると、さらに参加意欲が増し、活動が活発化するものと思われる。

感想でも見られたが、バリアフリーの街づくりは市単位というより地域全体で取り組む必要がある。そのためにも将来は、地元の大学等が連携して各地域と協力し、より広域的なバリアフリーの街づくり活動を展開していくことが望まれる。

謝辞：本研究の推進にあたり、松戸市都市整備本部企画管理室竹本氏、聖徳大学生涯学習研究所、「松戸のバリアとりのぞこ

う会」、松戸市まちづくり連絡協議会福祉の委員会、その他、講座に参加された多くの皆様のご協力をいただきました。記して深謝致します。なお本研究は、文部科学省学術フロンティア推進事業の研究助成を受けて行われた研究の一環です。

#### 参考文献、資料等

1. 千葉県総合企画部交通計画課、「千葉県の鉄道とバス [バリアフリー編] 交通バリアフリー法にもとづく県内市町村の基本構想作成状況」, [http://www.pref.chiba.jp/syozoku/b\\_koukei/train-bus/barrier-free/](http://www.pref.chiba.jp/syozoku/b_koukei/train-bus/barrier-free/)
2. 国土交通省都市・地域整備局、「交通バリアフリー法ホームページ」, <http://www.mlit.go.jp/crd/city/bf/>
3. 交通エコロジー・モビリティ財団、「らくらくおでかけネット」, <http://www.ecomo-rakuraku.jp/rakuraku/index/>
4. (財)国土技術研究センター「市民、NPO等による福祉のまちづくり活動研究」, 2002年, 8月
5. 国土交通省総合政策局交通消費者行政課監修、「交通バリアフリー法に基づく基本構想策定の手引き交通」, 交通エコロジー・モビリティ財団, 2002年, 9月
6. 国土交通省総合政策局交通消費者行政課監修, 交通エコロジー・モビリティ財団編著, 「写真で見る交通バリアフリー事例集」, 大成出版社, 2002年2月
7. 渡辺俊一編著, 「市民参加のまちづくり: マスタープランづくりの現場から」, 学芸出版社, 1999年, 2月
8. 柏市企画部企画調整課, 「街にでかけようーいつでもどこへでもーわたしたちにできること」, 2003年, 3月